

高大連携・他教科連携の課題研究

宮崎大学との高大連携協定にもとづき、本校の課題研究は、生徒グループ（6～7名×13グループ）の研究テーマに応じて、担当の大学の先生が設定され、助言をいただくことができるようになっている。

あくまでも助言である指導をするのは、本校の高校教員である。SGH 指定前は教科ごとのゼミナール方式であったが、指定後は職員も協力しあえる合教科の体制をとっている。

多面的評価—参加者も評価者に—

研究成果を2年次1月の「SGH 生徒探究発表会」において発表し、さらには、年次6月には、県内 SGH 校・SSH 校で「3校合同ポスターセッション」において英語で発信する。



この際に、宮崎大学との協働で開発したポスターセッションの専門家による評価と、参加者による投票形式の評価を行うことによって、多面的に生徒の評価を行うことができるようになった。

地域の魅力を素材にイノベーションの方法を学ぶ

一般社団法人 i.school と連携し、「T I S P（イノベーション・サマープログラム）」を実施している。イノベーションの方法論を学んだ国内外の学生が高校生をファシリテートする4泊5日のワークショップである。宮崎の企業を訪問しインタビューで情報を収集し、これをもとにアイデアを創出していく。期間中すべて英語でディスカッションを行う。現在県内の高校にも普及し、3校合同で実施している。

現地校・機関と緊密に連携した海外研修

台湾は姉妹校の高雄高級中學、ベトナムはカオバクワット高校・グエンタタン高校、シンガポールはジュロン・パイオニア・ジュニア・カレッジ、シンガポール国立大学の海外高大連携、クリアシンガポールなど海外機関との連携のもと海外研修を実施している。課題研究にもとづいたテーマ設定を行い、現地校で研究計画のプレゼンを行って、ディスカッ

ションを行い、現地高校・大学生と協働で調査を行い、プレゼンを作成し、発表を行う。

航空券とホテル等を業者、内容はすべて現地校と本校職員が海外研修を設計している。

指定学科の中でも海外研修の経験者と非経験者では英語活用能力においても伸びに差が見られる（表1）。また、プログラムの性質の異なる研修先別でも異なる（表2）。これは、海外研修を実施して毎年同様の結果が得られている。

表1 海外研修経験者と非経験者（共に SGH 対象生徒）の4技能の平均点推移（2018年度6月-12月）

学科	月	R	L	W	S	Total
海外研修経験者	6月	235	243	243	235	956
	12月	224	251	247	275	997
海外研修非経験者	6月	209	220	237	224	890
	12月	205	218	236	260	919

表2 海外研修先別の（すべて SGH 対象生徒）4技能の平均点推移（2018年度6月-12月）

学科	月	R	L	W	S	Total
台湾	6月	225	251	247	229	952
	12月	207	244	244	268	963
ベトナム	6月	240	243	246	241	971
	12月	232	258	244	272	1006
シンガポール	6月	241	241	237	237	955
	12月	233	252	253	285	1022

海外連携校と科学を通じた国内交流

台湾・ベトナム・シンガポール4校の連携校の先生・生徒が本校に来校し、①課題研究のプレゼンテーション・ディスカッション、②5校合同のフィールドワーク・科学実験教室を宮崎大学と連携し実施している。

英語4技能に見られる生徒の違い

開発研究の過程で、英語活用の機会を得た生徒は、6ヶ月後に顕著な変化があることが明らかとなっている。また、活用の機会が多い SGH 対象生徒と乏しい非対象生徒では明らかな差がある（表3）。活用の機会を得ることは4技能向上には有用な視点である。

表3 2018年度3年生・SGH 対象生徒 GTEC34 回結果

CEFR LEVEL	SGH 対象生徒		SGH 非対象生徒	
	Reading	Listening	Reading	Listening
B 2	23%	24%	1%	3%
B 1	65%	68%	29%	30%
A 2	12%	8%	65%	60%
A 1	0%	0%	6%	7%